歴史館だより

財団法人最上義光歴史館Vol.7 開館10周年記念号　平成12年3月発行

新たな十年へのスタート

財団法人最上義光歴史館
理事長　山口　寿男

平成元年十二月一日に最上義光歴史館が開館して早いもので十周年を迎えました。

最上義光公の時代に想いを馳せ、貴重な資料を収集され、開館にご尽力された諸先輩のご熱意ご労苦にあらためて敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げたいと存じます。

この間、より充実した展示をめざして資料収集を継続して進めるとともに、企画展の開催、館内外での成人や子ども向け歴史講座の開講など多くの方々にとって身近な歴史館になるようにと努めてまいりました。開館以来の入館者は二十万人を超え、みなさんのご協力をいただき、偉大な業績を残した戦国武将最上義光公を広く県内外に紹介することができました。

義光公が出羽の国を治めた時代は、山形にとって画期的な時代でありました。二、〇〇〇年の今年は、関ヶ原合戦とその地方戦といわれた長谷堂合戦からちょうど四〇〇年にも当たっております。

今、山形城本丸の遺構調査が行われ、石垣や堀跡が往時の姿を現わしてきております。それを目のあたりにしていると当時の熱気が伝わってくるようで目頭が熱くなります。

新たな十年へのスタートに当たって、歴史館の役割の重大さを改めて痛感いたしております。今後とも、山形の歴史を学び合う場として多くの方々に親しんでいただけるように努めてまいりたいと存じますので、一層のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

開館10周年に寄せて

山形市長
吉村　和夫

最上義光歴史館は、市制施行百周年の平成元年十二月の開館以来、多くの皆様に利用され、昨年十周年を迎えることができました。これも義光公に関する資料収集など多くの関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

当歴史館は、今日の県都山形の発展の基礎を築いた義光公の業績を顧みて、市民の郷土に対する理解を深めるため設立したものであります。私も、城下町づくり、産業育成、上方文化の移入など、未来を見据えたその卓越した洞察力、実行力に大きな感銘を受けております。

義光公の時代と同様、大きく社会が変動している今、歴史と伝統を教訓としながら、二十一世紀の山形の姿を想い、豊かな自然、環境の財産を生かした「環境先進都市」を市民と共に創っていこうと、決意を新たにしているところであります。

今後より多くの皆様に親しまれる歴史館を目指し、管理運営法人の財団法人最上義光歴史館と連携し、施設整備、運営の充実に努めてまいりますので、皆様のなお一層のご支援をお願いいたします。

最上家第47代当主
最上　公義

当歴史館が創立十周年を記念して「歴史館だより」の特別号を発行される運びとなりましたことは御同慶に存じます。

山形新聞・山形交通グループ連合会長の故服部敬雄氏が永年胸中に秘めて来られた歴史館についての構想が実現してから早や十年になります。

歴史館は最初の五年間にその基礎を着々と築き、次の五年間には徐々に業務の範囲を広げ義光公の遺した業績に対する市民の皆様の認識を深めるに至ったと存じます。中でも特に義光公が武力を以て領地を広めたという丈でなく、文の面でも短歌や連歌等を当時の有名人に伍して楽しんだという記録があります。こうしたことは従来、余り知られていなかったのですが、歴史館の諸氏の努力に依って曙光を浴びる様になって参りました。

学校や各種事業所からの講演の依頼も多いようでありますので、これらの講演をはじめ、その他の活動を通して、山形の皆様の歴史への認識を更に深めるための一助ともなることを期待し、歴史館の一層の発展をお祈りして、お祝いの言葉と致します。

除幕された義光公と駒姫の木彫像（長橋阿久於氏制作）

最上義光歴史館刊行物

■**最上義光歴史館開館記念展図録**
初版　平成元年12月1日
（発行　山形市教育委員会）
B5判／110ページ　品切れ

■**評伝　最上義光**
著者　高橋富雄
初版　平成元年12月1日
（発行　株式会社山形新聞社）
A5判／72ページ　価格　六〇〇円

■**図録　山形県城郭古絵図展**
初版　平成2年6月22日
B5判／60ページ　品切れ

■**最上義光歴史館収蔵品図録**
初版　平成3年3月31日
B5判／90ページ　価格　一〇〇〇円

■**最上義光歴史館増築記念特別企画展　戦国武将墨跡展　図録**
初版　平成4年4月17日
B5判／66ページ　価格　一〇〇〇円

■**最上家名宝展　山形を築いた最上義光**
初版　平成4年10月1日
B5判／46ページ　価格　一〇〇〇円

■**斯波と最上　最上家菩提寺展**
初版　平成5年5月1日
A4変形判／40ページ　価格　八〇〇円

■**特別企画展図録　武人画家　郷目右京進貞繋**
初版　平成6年4月26日
B5判／48ページ　価格　一〇〇〇円

■**最上義光歴史館**（有料パンフレット）
初版　平成7年3月31日
A4判／16ページ　価格　五〇〇円

■**生誕四五〇年記念　虎賁郎将最上義光**
初版　平成8年9月29日
改訂　平成9年3月1日
A4判／20ページ　価格　三〇〇円

■**新稿羽州最上家旧家臣達の系譜**
―再仕官への道程―
著者　小野末三
初版　平成10年3月31日
A4判／340ページ　価格　三〇〇〇円

落成オープンした最上義光歴史館

展示品に見入る落成式典参列者たち

最上義光公菩提寺
光禅寺住職
最上　頴一

歴史館がオープンして十周年を迎え、誠に慶祝の至りに堪えません。開館以来幾多の困難を克服し、資料の収集に当られた山新グループ始め、館長さん及び関係者の御苦労は並大抵のものではなかったろうと思います。又展示協力者の御厚意等により展示資料も次第に増え、更に毎年時宜を得た各種の催しものが企画実施されて来たことが館の利用者、入館者の増加を来たしたものと思い、誠に喜ばしい限りであります。ここに関係者各位に深い敬意と感謝の念を捧げるものであります。今や歴史館が近世山形市の歴史を知る上に、又文化の向上に極めて大きな役割を果していることを思う時、館の存在意義は誠に大きいものがあると言わなければなりません。今後歴史館の更なる発展を祈りつつ所懐の一端を記して、お祝いの言葉と致します。

山形大学名誉教授
横山　昭男

本館は小さいながら、山形城大手門の前にあって、山形の歴史と文化の真髄を発信する場である。開館以来一〇年の活動は、地味ではあるが、約四〇〇年前に山形の町の基礎を確立した大名最上義光の事業をはじめ、同時代ゆかりの絵画等の美術品やその後の山形の産業や文化の歩みに関する企画展示等も開催された。また歴史講座も、山形だけでなく、上山市、山辺町、天童市などの協力を得て、本館主催の独自企画で行われたこともある。本館の存在感をアピールする上でも有意なことであったと思われる。

これからの二一世紀は、量よりも質が問われる時代であるといわれる。本館は同類の他館に比べれば所蔵品等で苦しい面もあるが、今後その運営に本館らしい個性的な独自性が望まれる。生涯学習や児童生徒の学習にも活用されるとともに、山形の伝統文化の発展や研究に寄与するため、館の一層の充実を図ることも不可欠の課題である。山形城本丸の石垣・土塁の発掘も本格化し、その姿を表わしつつあるが、本館の活動もそれと共鳴して高まることを期待したいものである。

特別寄稿

初めての祖父の地に胸が熱くなる

最上家第47代当主令夫人
最上勢津子

初めて山形を尋ねましたのは最上三十三観音札所五五五年御開帳の年でございました。空港に降り立ちました瞬間に、ここが父祖の地と胸が熱くなりましたことを覚えております。広い「さくらんぼ」と「りんご」畑を眺めながら山形市へ入り昼食におそばを御馳走になりました。そのおそばの美味しかった事が今でも忘れられません。霞城公園で馬上の義光公の銅像と対面し、これが山形の皆様のお力で建立された銅像なのかと改めて感激を覚えました。三十三観音へは山形新聞社の方に御案内して頂き十ヶ寺余りお詣り致しましたが各お寺様では温かくお迎えして頂き又途々で見知らぬ方々と御挨拶を交し、たいへん近親感を覚え、里帰りをしたかの様になつかしさを感じました。平成元年に最上義光歴史館が設立されまして最上家代々の家宝の義光公着用の兜を山形へお預けすることになりました。歴史館に展示されました兜を通じて山形の皆様に義光公を偲んで頂きたいと存じた次第でございます。設立以来十年と云う記念すべき年に当りまして山形の皆様に義光公の遺徳を一層偲んで頂きたいと念じております。歴史館の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

関ヶ原合戦と最上義光

――義光宛家康書状を読み解く――

小和田　哲男

はじめに

今年西暦二〇〇〇年は、関ヶ原の戦いからちょうど四〇〇年ということで、関ヶ原の戦いに対する関心の度が高くなっている感じがする。そこで、〝東北版・関ヶ原〟などといわれる長谷堂城の戦いにからめ、そのときの最上義光の動向を追いかけてみたい。

周知のごとく、家康は、関ヶ原の戦いを前にして、諸大名に実にたくさんの書状を出しており、慶長五年（一六〇〇）に入って、戦い直前九月十四日までの分だけでも一六九通を数えている。書状の内容は、恩賞を約したものもあれば、上方での戦況を報じたものもあり、作戦上の指示を与えたもの、さらには東軍へ誘ったものなどまちまちであるが、これら政治工作、すなわち、根まわしが進められたことを意味する。

そこで、ここでは、家康から最上義光に宛てられた書状を通して、義光が、家康の考える大きな関ヶ原戦略の中で、どう位置づけられるのかを見ていくことにしたい。なお、書状については読み下しにして引用した。原文は、中村孝也編『徳川家康文書の研究』中巻にあたっていただきたい。

第一報　七月七日付

急度（きっと）申し入れ候。仍（よ）って会津表出陣の儀、来る廿一日に相定まり候。その表の衆、同心有り、御参陣有るべく候。然者（しからば）、最寄（前カ）申し候如く、北国表にて北国の人衆を相待ち、会津へ打ち入らるべく候。猶、津金修理亮・中川市右衛門申し達すべく候。

恐々謹言

七月七日（慶長五年）　　御諱（徳川家康）御判

出羽侍従（最上義光）殿

（「古文書集」十）

家康は、六月十八日、伏見城を発し、会津討伐に向かった。「五大老」の一員であるにもかかわらず、上杉景勝が会津に引っこんだまま、領内の軍事強化を進めていることを、「豊臣家に対する謀反」と判断したためである。もちろん、家康の腹の中には、畿内を留守にすることによって、石田三成の挙兵を誘うという思惑もあった。

七月二日に江戸城に入った家康が、七日付で最上義光に出した書状がこれである。ちなみに、会津攻めにあたって家康が定めた部署はつぎの通りである。

白河口　徳川家康・秀忠および東海・畿内の大名

仙道口　佐竹義宣

伊達・信夫口　伊達政宗

米沢口（最上口）　最上義光と仙北（最上川以北）の諸大名

津川口（越後口）　前田利長・堀秀治・同直寄・村上義明・溝口秀勝

七日付書状に、「猶」としてみえる津金修理亮と中川市右衛門の二人は、家康の家臣で、このとき、使者となって山形に赴いている。もっとも、この二人は、単なる使者ではなく、家康から最上家に送りこまれた軍監のような立場だったのではないかと思われる。というのは、同じ七月七日付で家康がこの二人に宛てた覚書が「書上古文書」にあり、そこに、会津へ攻め入るときには義光を先手とすること、戦いになったときには兵糧を義光から借りることなどが指示されているからである。

そして、家康は、予定通り、七月二十一日に江戸城を出陣し、会津攻めに向かった。ところが、二十二日、二十三日と軍を進める内に、三成挙兵が次第にたしかな情報として入ってくるようになり、二十三日、下総の古河に着いたところで、進軍中止を指令した。それを物語るのがつぎの義光宛第二報である。

第二報　七月二十三日付

急度申し入れ候。治部少輔（石田三成）・刑部少輔（大谷吉継）才覚を以って、方々に触状を廻（めぐ）らすに付て、雑説申し候条、御働の儀、先途御無用せしめ候。此方より重ねて様子申し入るべく

候。大坂の儀は、仕置等手堅く申し付け、此方は一所に付、三奉行の書状披見の為これを進せ候。恐々謹言

七月廿三日（慶長五年）　家康御判

出羽侍従殿（最上義光）

（「譜牒餘録後編」四）

この文書は、家康が会津討伐中止を指令した一番早いものである。このあと、二十四日に家康は下野小山まで進み、二十五日、有名な「小山評定」を聞き、そこで、反転して畿内にもどり、石田三成を討つ作戦を決めている。そして、家康自身、二十六日に小山の陣を引き払い、八月五日に江戸城にもどるわけであるが、その間、諸大名に精力的に書状を出している。つぎの第三報もその一つである。

第三報　七月二十九日付

急度申し入れ候。仍って上方奉行衆一同の者、鉾楯の由申し来るに付て、会津を閣、先ず上洛せしめ候。併、中納言（秀忠）差し置き、候条、彼表働の儀を相談尤に候。猶、後音の時を期すべく候。恐々謹言

七月廿九日（慶長五年）　御諱（徳川家康）御判

出羽侍従殿（最上義光）

（「古文書集」十）

ここで注目されるのは、会津のことはひとまずさしおいて、まず上方にもどり、三成を討つことにしたことを義光に伝えていることと、「秀忠を押さえとして残したので、今後のことは相談するように」といっている点である。

つまり、七月二十九日の時点では、家康は秀忠を残すつもりでいたことがわかる。事実、秀忠軍が下野宇都宮を陣払いしたのは八月二十四日であった。そのあと、代わったのが結城秀康ということになる。

江戸城にもどった家康は、何と二十六日間もの間、動こうとしなかった。その間、東軍先鋒として福島正則ら豊臣恩顧の大名たちが東海道を西に攻めのぼり、八月二十三日には岐阜城を攻略している。家康から義光への第四報はそのことにかかわるものである。

第四報　八月二十七日付

急度申し入れ候。去る廿三日午の刻、岐阜の城乗崩し、中納言（織田秀信）兄弟一人も洩らさず撫切申す由注進候条、書状持たせ進せ候。政宗より参るべく候。我等父子も出陣申し候間、万事そこもと御行仰せ付けられ給うべく候。委細宗薫（今井）申すべく候間、具にする能わず候。恐々謹言

八月廿七日（慶長五年）　家康御判

出羽侍従殿（最上義光）

（「譜牒餘録後編」四）

家康はこのように、東軍先鋒の戦いの模様を義光に報じており、翌日にも、第五報（八月二十八日付）で三成らが美濃に出てきたことを伝えている。

おわりに

九月十五日の関ヶ原の戦いを前にした義光宛家康の最後の書状は九月七日付で、これが第六報ということになる。

そこでは、三成らを大垣城に「追籠」たことを報じ、「其口（米沢口）、政宗と相談し、油断無き行等、分別尤に候」といっている。

おそらく、この第六報が義光の手もとに届く前のことと思われるが、上杉景勝の老臣直江兼続が最上領へ侵入してきた。九月十三日には、山形城の支城である畑谷城が攻められ、城将の江口五兵衛父子が殺され、水原親憲率いる上杉軍はその勢いで長谷堂城を包囲しているのである。

上杉軍の猛攻を支えながら、長谷堂城が破られた場合、本拠山形城も危なくなると判断した義光は、長子義康を政宗の本陣北目城に人質として送り、援軍の要請をしている。

結局、政宗は自分の名代として伊達政景を援軍に送り、最上・伊達連合軍有利な状況となった。その長谷堂城の攻防戦の最中、具体的には九月三十日の朝といわれているが、関ヶ原での東軍勝利の報が最上陣営に届けられ、ついに、十月一日、長谷堂城攻囲の上杉軍が撤退したのである。

小和田哲男（おわだ・てつお）
一九四四年　静岡市に生まれる。
一九七二年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。
現　在　静岡大学教育学部教授・文学博士。
戦国時代が専門で、専門書『後北条氏研究』から『日本の歴史がわかる本』などの啓蒙書の執筆、さらには『歴史読本』や『プレジデント』など、幅広い執筆活動を展開している。
また、NHK TV『堂々日本史』、『ニッポンときめき歴史館』、日本TV『知ってるつもり!?』などにも出演している。96年NHK大河ドラマ『秀吉』の時代考証を担当。

最上義光と社会科の授業

山形市立金井中学校　後藤和代

戦国武将が好きな子どもたち

「先生、早く信長や秀吉の時代を勉強したいなあ。」と時折つぶやく子どもたち。下剋上の時代に、自分の能力と才覚でのしあがっていく、波乱に満ちた生涯に魅せられるのだろうか。時には肉親さえも殺さなければならない、非情な決断を迫られる社会の中での生き方に引かれるものがあるのだろうか。

一年生を受けもつと、必ず戦国時代の新聞を作らせる。興味をそそられる題材はがんばって調べるからである。しかし、その中で山形の武将である最上義光をとりあげる生徒はきわめて少ない。

意外と知られていない義光

今年度の調査では、山形の戦国大名である最上義光の名前を知っている生徒は、三十八名中、十五名であった。しかし、どんな人物なのか、何をした人なのか、になるとほとんど知らないというのが実情である。生徒たちに学ぶ機会を与えていないからにほかならない。

義光が戦国大名として大きく力をたくわえていく経緯や、現在の山形市の土台となった城下町づくり、富国強兵のためにとったさまざまな出だて、最上家をおそった数々の悲劇など、いづれをとっても、歴史の教材として提示できる要素が十分に整っている、と思われるのに。

最上義光を調べてみよう

郷土の戦国大名である義光を、歴史の授業で教材化できないか、と思い、数年前県社会科研究会のとき、授業づくりに取り組んでみた。その当時も、義光を知っている生徒は数名にすぎず、「よしあき」と正しく名前を読めた生徒も数名であった。

生徒たちは、霞城公園にある銅像の人物が当時としては五十万石以上という戦国大名だった、という事実がわかると、

「どのようにして、大大名になったのか」

「どんな生き方をした人物なのか」など、調べてみたいことがたくさんでてきたのであった。そこで、いくつかの班に分かれて、次のようなことを調べることにした。

①義光の生涯とおもな戦い

②義光が行った政策と残した業績

ア、山形城の改築と城下町

イ、家臣団と家法

ウ、商工業の発展のために

エ、信仰と文化

オ、治水と交通

カ、北楯大堰の開発

③義光とその家族

④秀吉や家康との関わり

⑤義光の性格

⑥最上家は義光の死後どうなったか

調べることが好きな子どもたち

調べたいという気持ちが強く、調べることがはっきりすると、生徒たちはびっくりするほど積極的に動くようになる。

畑谷城跡や長谷堂城跡に実際に登ったり、空堀のあとに降りたって、当時の戦いの様子を思いやった生徒や、駒姫と義光の菩提寺をカメラに収めてきた生徒たちもいた。

子どもたちは本来、知的好奇心が強いので教師がそれを上手に引き出し、リードしていかなければならないことを実感した日々であった。

地域を知る

本校の学区内にも、義光に関連する史跡などが存在することを知り、それを調べるため地域の人たちに聞きに行った生徒たちもいた。

義時と戦ったときの首塚や、「陣場」「江俣」という地名の由来、馬見ヶ崎川の流れの変化や、金井小近くの「桜の渡」など、自分たちの知らなかった地域を、また違った目でみつめなおすことができたのは、大きな収穫であった。

総合学習の一環として

文部省では、平成十四年度より、小・中学校において、「総合的な学習の時間」を創設することを決定している。

その指導内容は、各学校の創意工夫に委ねられているので、どのように単元開発を進めていくのかが最大の課題であり、悩みともなっている。

郷土を知り、郷土の人物を通して、自分の生き方を考えさせることができる教材としてこれからも最上義光をとりあげた学習ができればいい、と思っている。

歴史随想

私の歩く道から

女性歴史サークル・やまがた　須藤　路子

私は霞城公園の南側の、お堀に接する道を歩く機会が多い。冬には何物もはね返すような、厳しい空気を吸い込み、春にはたおやかな女性のような息吹きを感じながら、四季折り〳〵に移ろう、土手の桜並木やお堀の水面（みなも）を眺める。そして、その道を歩くことを喜びにしている。

気がつくと、私は「日本史って、私の得意科目なの…」と言っていた。そんな私をたどってみると、小学六年生の社会科（日本の歴史）の授業からだったと思う。あの頃、担任の先生が病気で休んでおられた。その間、社会科は校長先生の担当だった。

「時は永禄三年、織田信長は人生わずか五十年と鼓に合わせて舞い、それが終ると湯づけを食し…わずかな手勢を率いて…」。

校長先生は、有名な桶狭間の合戦など戦国時代の出来事を、講談師みたいに、レポーターみたいに、臨場感溢れる巧みな話術で、私達に語って下さったものだった。そして、いつもクラス全員が話しに吸い込まれていた。それから、私は日本史を学ぶことが大好きになり、難解だった人名や地名が、スラ〳〵と覚えられるようになった。先生の話しを聞きながら、戦国武将達の戦（いくさ）になるまでのプロセスや、戦場における心理状況等は、不思議で仕方がなかった。落城に伴い、その城の炎の中に自分の身を投じてしまおうと決断する瞬間の心の動きはどうだったのだろう……。

今〝女性歴史サークル・やまがた〟のメンバーと一緒に、県内外の歴史を学んでいる。講座の中では、教科書には出て来ない、庶民や女性の姿に興味がそそがれる。そんな人々のエピソードはなおさらおもしろい。

歴史は後世に、名を残すような人々で、作るのではない。その時生きている全ての人が、生きることと、その連続によって作られる、などと考えながら、仲間と学んでいる。一人で学ぶことは困難でも、仲間がいれば楽しく学び合いを続けられる。それが、仲間や私の歴史に、そして山形の歴史の一つにも、繋がっていくだろう。

当時、校長先生は「人生わずか五十年、と舞った織田信長の頃、平均寿命は四・五十歳だったろう」と話しておられた。それから、約四百年後の今は、八十代半ばまで生きる、さらに、子どもの数が減少して、これまでの日本では、経験したことのない少子高齢社会を迎えた。このようなことを始め、現在の社会を取り巻いている変化のうねりは、これまでの日本のあり様（よう）を問い直す、社会の枠組の変革だとも聞くことがある。

このような社会環境の中でこそ、ボランティア活動や地域作り、地域おこし活動等の市民活動、スポーツや趣味を大切にする生涯学習等が、心豊かな人生作りの一つにも役に立ってくる。また、これからの社会作りにも大きな役割を担うだろう。

地域づくり、地域おこしの活動では、地域の歴史や文化を知り、そこから学び、良さを生かす知恵が必要になるだろう。と同時に、その地域に住む人が、どんな地域にしたいのか、そのあり様（よう）を自身に問い直しをする必要も出て来る。

今、まさに新しい歴史作りを始める時が来ている。市民活動や生涯学習を通して、多くの人々とネットワークしながら、社会参加をすることで、自分自身にも山形にも、新しい歴史が形作られると信じている。

春の夕暮れ近く、霞城公園の中に入ると、たおやかな風に乗って梅の香りがあった。近くのテニスコートのポーンポーンというボールの音と共に、はずむ女子高生の声がする。数百年の時を刻むこの城跡は、幾多の動乱の時代も見ている。今年、新しいミレニアムを迎えて、この城跡には、おだやかなゆったりした市民の歴史を、刻み続けていってくれることを願ってやまない。

さあ、私は明日も、あの道を歩いて行こう。

俳句

山形城址

俳人協会評議員
山形俳人協会顧問
「橡」同人・「紅花」主宰
土屋巴浪

騎馬像や指揮棒の指す天高し

城跡に舞ふ琴の音や後の月

駒姫の墓にひよどり鳴き交す

菩提寺に瀬音やさしき春の川

大手門さくら吹雪に襲はるる

特集

特別企画展

山形市制施行110周年・最上義光歴史館開館10周年記念

最上時代の美術

～室町から江戸初期の絵画～

出山釈迦図・花鳥図　郷目貞繁筆

飛燕図　仲安真康筆

斯波兼頼画像

山水図　相阿弥筆

山形市が市制を施行してから一一〇周年、そして当館も開館一〇周年を迎え、この記念すべき年に特別企画展として開催いたしました。

最上家が山形を治めたのは、今からおよそ六五〇年前の延文元年（一三五六）最上家の初代斯波兼頼の山形入部から、十一代義光を経て、元和八年（一六二二）十三代家信の改易に至る約二七〇年間です。この二七〇年を山形の最上時代としました。

最上時代の優れた絵画作品を県内から一堂に集め、兼頼の入部から義守までを室町時代の絵画、義光の活躍から家信の改易までを桃山から江戸時代初期の絵画、とそれぞれの制作年代と特色ごとに紹介いたしました。

■会期　平成11年10月2日(土)～11月7日(日)

■会場　最上義光歴史館

■主催　財団法人最上義光歴史館

■後援　山形市、山形市教育委員会、㈱山形新聞社、山形放送㈱、㈱山形テレビ、㈱ヤマコー、山形ゼロックス㈱、蔵王菖蒲沼リフト㈱

出品目録

資料名	文化財の指定	点数	所蔵者
■室町時代の絵画―兼頼の入部から義守まで―			
1 絹本著色 斯波兼頼画像	山形県指定有形文化財	一幅	山形市・光明寺
2 紙本墨画 飛燕図 仲安真康筆		一幅	個人蔵
3 紙本墨画 山水図 相阿弥筆		一幅	個人蔵
4 紙本墨画 破墨山水図 狩野之信筆	市町村指定有形文化財	一幅	個人蔵
5 紙本墨画淡彩 瀟湘八景図 郷目貞繁筆	山形県指定有形文化財	一巻	個人蔵
6 絹本著色 出山釈迦図・花鳥図 郷目貞繁筆	山形県指定有形文化財	三幅対	個人蔵
7 紙本墨画 寿老図・芦雁図 郷目貞繁筆	市町村指定有形文化財	三幅対	個人蔵
8 紙本著色 花鳥図 狩野直信筆	山形県指定有形文化財	双幅	個人蔵
9 紙本著色 花鳥図 木村長光筆	山形県指定有形文化財	一幅	個人蔵
10 絹本刺繍 文殊菩薩像（永浦尼寄進）	市町村指定有形文化財	一幅	山形市・宝光院
■桃山から江戸初期の絵画―義光の活躍から家信の改易まで―			
11 紙本金地著色 花鳥図（伝最上義光所用団扇）		一本	個人蔵
12 紙本墨画 君子対棋図・君子騎馬図屏風 海北友松筆	山形県指定有形文化財	一双	山寺芭蕉記念館
13 紙本墨画 普化禅師像 瀬田掃部筆	山形県指定有形文化財	一幅	個人蔵
14 麻本著色 鷺鶴図 伝金岡用兼筆		一幅	個人蔵
15 板画著色 桜に牛図・馬師皇図（山形城本丸御殿杉戸）		二面	山形市・宝光院
16 板画著色 茅君図・蕭史図（山形城本丸御殿杉戸）		二面	山形市・宝光院
17 板画著色 鶴図・松図（山形城本丸御殿杉戸）		二面	最上義光歴史館
18 紙本金地著色 椿図（鶴ヶ岡城本丸御殿襖）	市町村指定有形文化財	一幅	致道博物館
19 紙本金地著色 群鶴図（鶴ヶ岡城本丸御殿襖）	市町村指定有形文化財	一幅	致道博物館
20 紙本墨画 葡萄栗鼠図 宮本武蔵筆	山形県指定有形文化財	一幅	個人蔵
21 紙本著色 鷹図 最上家親筆		二面	山形市・六椹八幡宮
22 板金地著色 猿駒曳図 最上家信筆	市町村指定有形文化財	三面	山形市・日枝神社

葡萄栗鼠図　宮本武蔵筆

桜に牛図

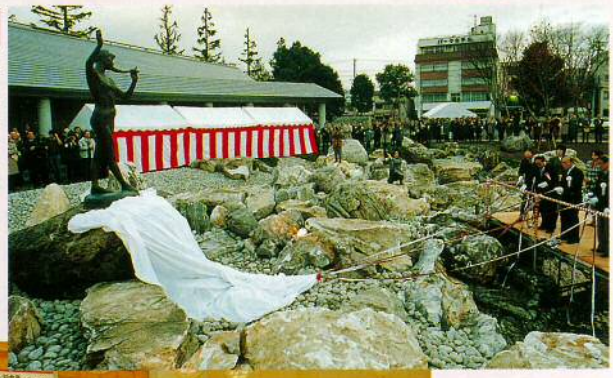
平成11年度のあゆみ

7月1日　喫茶室利用の入館者割引券発行
7月29日　こども講座「戦国時代にタイムスリップ～山形城のひみつをさぐろう～」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生
9月14日～19日　夏休み自由研究「山形城のひみつをさぐろう展」（小学校11校・18人の作品16点を展示）
9月18日・10月2日・9日　歴史講座①「やまがたの考古学よもやま話」講師・茨木光裕氏　「水野藩戊辰戦争の疑問」講師・川瀬同氏　「動乱と民衆～中世の山形～」講師・伊藤清郎氏
10月2日～11月7日　特別企画展「最上時代の美術～室町から江戸初期の絵画～」（山形市制施行一一〇周年と歴史館開館一〇周年を記念して・最上家が山形を治めた約二七〇年の間に描かれ、山形地方に残る優れた絵画作品22点を展示）
11月30日～12月5日　歴史館開館一〇周年記念無料開放
11月30日～1月10日　山形市指定有形文化財指定記念「平泉寺の絵馬」特別公開
2月12日・19日・26日　歴史講座②「遺跡分布からみたやまがたの歴史」講師・茨木光裕氏　「やまがたの和算」講師・板垣貞英氏　「城下町やまがたの誕生」講師・高橋信敬氏
3月7日～26日　「最上義光公百万石行列絵巻」特別公開

写真で綴る10年のあゆみ

1/21 小説家安西篤子氏の講演「戦国時代の女性たち」に耳を傾ける聴講者

平成元年度



12/1 歴史館前噴水池に設置されたブロンズ像「愛の女神」（佐藤忠良氏制作）の除幕式

12/1 歴史館落成記念展とブロンズ像建立を祝う祝賀会

連日歴史ファンで賑わう落成記念展

12/12 市街地観光の拠点に仲間入り。歴史館で研修する新人観光バスガイドさんたち

平成2年度

6/23 山形県内の主要都市の城下町絵図を展示した「城郭古絵図展」

オープンと同時に大勢の鑑賞者で賑わう甲冑展

10/17 「やまがた甲冑展」開展を祝いテープカットする関係者

10/27 最上家ゆかりの寺院を見学した史跡めぐりの参加者たち（専称寺にて）

平成元年度より平成十年度までの最上義光歴史館のあゆみ

平成元年度

6月9日～9月30日　最上義光歴史館新築工事

12月1日　最上義光歴史館開館（最上義光歴史展開催）

2月1日　財団法人最上義光歴史館設立

平成二年度

6月23日～7月15日　特別企画展「城郭古絵図展」（県内の城郭絵図25点を展示）

10月17日～11月18日　特別企画展「やまがた甲冑展」（県内の甲冑17領を展示）

10月18日　歴史講演会「斯波と最上」講師・高橋富雄氏

10月27日　史跡めぐり（山形市内最上家ゆかりの寺院を見学）

3月3日・10日・15日　歴史講座「最上義光の町づくり」講師・高橋信敬氏「最上氏領国の形成」、「最上氏領国の崩壊」講師・伊豆田忠悦氏

平成三年度

5月21日～6月16日　特別企画展「日本名刀展」（最上家親献上の大垣正宗など最上家ゆかりの刀剣22口を展示）

8月6日～2月20日　最上義光歴史館増築工事

9月20日～21日　歴史探訪会（県内最上領の城跡を二日間にわたって見学）

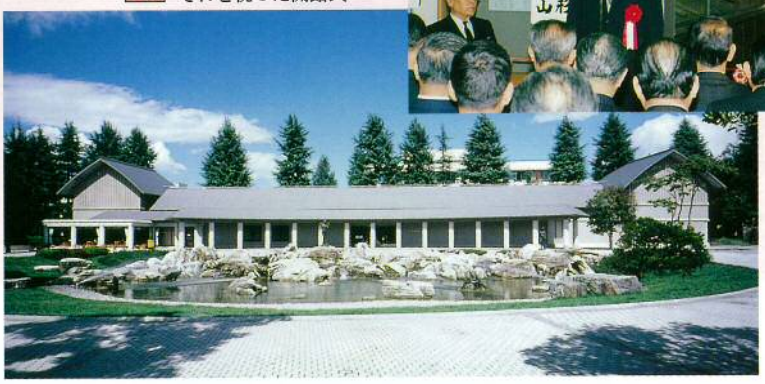
12月1日～1月24日　歴史館増築工事のため休館

財団法人 最上義光歴史館増築開館式

平成3年度

3/3 新たに収集した資料を鑑賞する理事・評議員

2/28 増築なった歴史館全景とそれを祝った開館式



平成5年度

5/1 「斯波と最上～最上家菩提寺展」開展を祝いテープカットする関係者

9/24 宮城県の中新田城跡（八幡宮）に参拝する歴史探訪会の参加者たち

12/11 こども講座で「カタナとヨロイのはなし」を聞くこどもたち

鑑賞者で賑わう「日本刀の美～郷土の刀工と県内の名刀展」（10/1～24）

平成4年度

徳川家康書状も展示した「戦国武将墨跡展」のパンフレット

10/1 「最上家名宝展」の開展式に参列した関係者

10/17 庄内地方の城跡で説明を聞く歴史探訪会参加者たち

12月20日・1月10日・17日　歴史講座「最上義光とその周辺」講師・後藤禮三氏　「最上義光と近世山形の開幕」講師・横山昭男氏　「戦国の世と最上義光」講師・誉田慶信氏

1月21日　歴史講演会「戦国時代の女性たち」講師・安西篤子氏

2月28日　増築開館式と新収蔵品の展示　喫茶室営業開始

平成四年度

4月17日～5月17日　特別企画点「戦国武将墨跡展」（最上義光と同時代を生きた武将等の文書52点を展示）

9月12日　歴史講演会「戦国時代の群像」講師・永井路子氏

10月1日～25日　特別企画展「最上家名宝展」（重要文化財3点を含む最上家に係わる名品、未公開資料を展示）

10月16日～17日　歴史探訪会（庄内地方、秋田県南部の城跡を二日間にわたって見学）

1月20日・2月20日　歴史講座「山形県内の中世城郭をめぐって」講師・伊藤清郎氏　「金属の伝承と山形」講師・野口一雄氏

平成五年度

5月1日～30日　特別企画展「斯波と最上～最上家菩提寺～展」（最上家初代斯波兼頼公から歴代の資料を展示するとともに歴代の菩提寺を紹介）

9月24日～25日　歴史探訪会（最上家初代斯波兼頼公の出身地である今の宮城県中新田町の城跡等宮城・岩手両県の史跡を二日間にわたって見学）

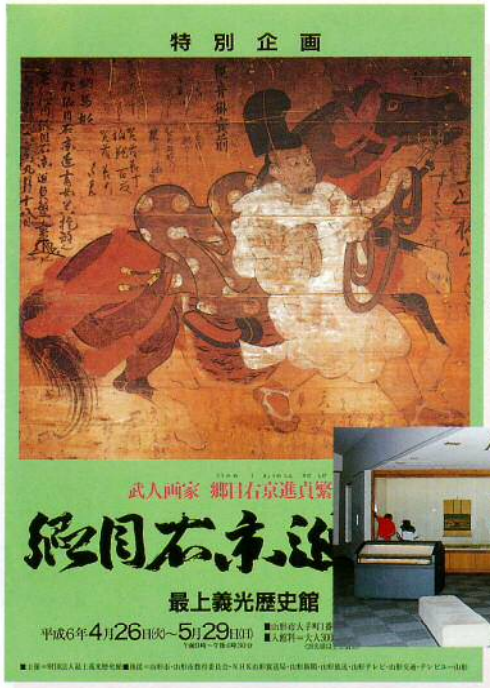
10月1日～24日　特別企画展「日本刀の美～郷土の刀工と県内の名刀～展」（郷土の刀工の作品21口　と県内所蔵の9口を展示）

10月12日　歴史講演会「戦国時代の妻たち」講師・北原亜以子氏

12月11日　こども講座「カタナとヨロイのはなし」講師・上林恒平氏

2月5日・19日　歴史講座「戦国時代の手紙を読むⅠ、Ⅱ」講師・武田喜八郎氏

平成6年度



山形を拠点に活躍した武人画家展のリーフレットと展示風景

「伊達政宗展」の案内看板と展示した政宗所用の鉄黒漆五枚胴具足

9/11 横手城跡で説明を聞く歴史探訪会の参加者たち

10/8 山形城を探検することも講座の参加者たち

平成7年度

入館者で賑わう「戦った男たちの砦～やまがたの古城跡展」(9/20～10/29)と再現された長谷堂城大手門(扉の部分が約400年前の実物)

「鉄と火と水と～刀匠上林恒平展」(5／2～6／4)と恒平氏の火造りの実演に集まった見学者たち

1/13 義光公生誕450年を記念して行われたフォーラム風景

平成六年度

4月26日～5月29日　特別企画展「武人画家郷目右京進貞繁展」(戦国時代に山形を拠点として活躍した郷目の重文を含む作品19点を展示)

9月11日～12日　歴史探訪会(横手城跡等秋田県の史跡を二日間にわたって見学)

10月1日～24日　特別企画展「みちのくの華～伊達政宗～展」(仙台藩初代藩主伊達政宗を中心に文武両道からの名品29点を展示)

10月8日　こども講座「やまがたの歴史―山形城を探検しよう―」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生

1月18日　歴史講演会「最上義光とその周辺」講師・三好京三氏

1月28日・2月11日・28日　歴史講座「戦国時代の手紙を読む」講師・武田喜八郎氏

平成七年度

5月2日～6月4日　特別企画展「鉄と火と水と―刀匠上林恒平―展」(山形市長谷堂在住の刀匠の作品39点を展示するとともに実演によりその技を紹介)

6月18日～19日　歴史探訪会(置賜地方、福島県会津方面の上杉家や伊達家の史跡等を二日間にわたって見学)

7月8日・15日・22日　歴史講座「女性歴史セミナー・やまがた」講師・歴史館職員

9月9日　歴史講演会「肖像画に見る戦国時代の人びと」講師・二木謙一氏

9月20日～10月29日　特別企画展「戦った男たちの砦～やまがたの古城跡～展」(山形城を中心に8ヵ所の城の資料・文化財・遺物等56点を展示)

10月4日　こども講座「古城跡探検」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生

10月7日・21日　特別講話「戦国武将の祈り」講師・渡辺信三氏　「やまがたの古城」講師・伊藤清郎氏

1月13日　最上義光公生誕四五〇年フォーラム「最上義光を語る」講師・横山昭男氏　佐々木悦氏　名子喜久雄氏　高橋穣氏

平成8年度

9/29 繁華街を練り歩く市民公募の大名行列

9/29 大勢の関係者が参加した「最上義光公を讃えるつどい」

9/28 行事のあい間のひととき（最上家第47代当主最上公義氏と令夫人勢津子様）

9/29 最上家関係寺院をめぐった史跡探訪会（清源寺にて）

「出羽の虎将・最上義光～人物と業績展」の案内看板と展示風景

10/19 大勢の受講者が参加した特別講座「最上時代の山形城下」

平成9年度

10/11 双葉公園の山形城三の丸堀跡の説明を聞くこども講座の参加者たち

「山形城と城下町の面影展」の案内看板と展示風景

平成八年度

7月2日～8月31日　最上義光公生誕四五〇年記念歴史館市民無料招待

7月6日・13日・20日　歴史講座①「最上義光公と山形」講師・武田和宏氏　歴史館職員

9月20日～10月27日　特別企画点・最上義光公生誕四五〇年記念「出羽の虎将・最上義光―人物と業績―展」（義光公に係わる生涯や人柄、業績等を紹介するとともに資料45点を展示）

9月29日　最上義光公生誕四五〇年記念「最上義光公を讃えるつどい」（史跡探訪「最上家関係寺院、長谷堂古戦場、山形城」　講話「新しい時代を開く最上義光」講師・横山昭男氏・渡辺信三氏・伊藤繁雄氏）

10月19日　特別講話「最上氏時代の山形城下」講師・高橋信敬氏

10月26日　こども講座「義光の時代の史跡をめぐろう」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生

2月2日・9日・16日・23日　歴史講座②「最上義光の連歌を読み味わう」講師・名子喜久雄氏

平成九年度

4月21日・11月22日　会沢金山遺跡調査

6月21日・7月19日　歴史講座①―歴史セミナー・かみのやま「上山と関ヶ原合戦」講師・木村昭一氏「近世の開幕と上山」講師・横山昭男氏―歴史セミナー・やまのべ「山野辺義忠と最上義光」講師・後藤禮三氏「近世の〝まち〟の展開とやまのべ」講師・横山昭男氏

9月14日～10月19日　特別企画展「山形城と城下町の面影」（山形城の変遷と今の町並みにみる城下町の面影を関係資料57点によって紹介）

10月11日　こども講座「やまがたの歴史・義光公ゆかりのお寺をめぐろう」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生

1月16日・17日・18日　歴史講座②「最上義光の連歌を写本で読もう」講師・歴史館職員

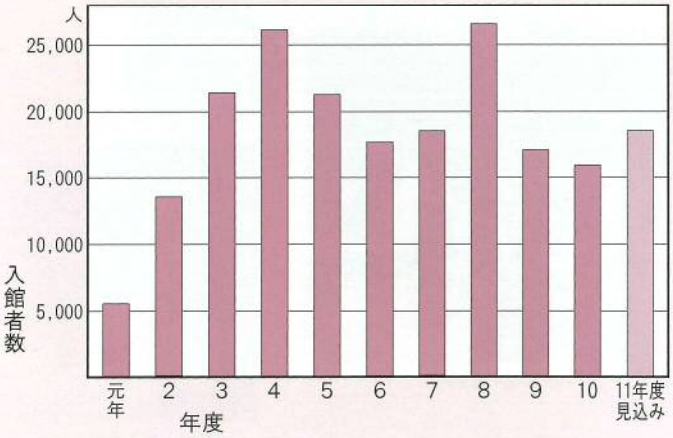
2月13日・14日・15日　歴史講座③「山形の古墳」講師・茨木光裕氏　「山形城の歴史」講師・誉田慶信氏　「戊辰戦争と山形」講師・川瀬同氏

平成10年度

「紅花と青苧と漆の国展」の開催案内看板と展示・鑑賞風景

2/15 「戊辰戦争と山形」について学んだ歴史講座の受講者たち

入館者数の推移



平成十年度

7月25日・9月5日　歴史講座①＝歴史セミナー・なかやま「近世のなかやま」講師・横山昭男氏　「古代中世の中山町」講師・川崎利夫氏＝歴史セミナー・てんどう「近世のてんどう」講師・横山昭男氏　「万葉時代のてんどう」講師・川崎利夫氏

10月10日～11月15日　特別企画展「紅花と青苧と漆の国」（最上山形の名産品である「紅花」「青苧」「漆」についての資料73点を展示）

10月24日　こども講座「山形城と城下町をさぐろう」講師・山形市小学校教育研究会社会科部会の先生

1月15日・16日・17日　歴史講座②「最上義光の連歌を読み味わう」講師・歴史館職員

2月13日・20日・27日　歴史講座③「山形の古城」講師・伊藤清郎氏　「戊辰戦争と山形」講師・川瀬同氏　「山形の古墳時代」講師・茨木光裕氏

開館十周年・紙上座談会

山形の歴史と歴史館に思う

山形商工会議所会頭　鈴木伝四郎氏
霞城郷土史愛好会　石川藤男氏
山形市小学校教育研究会社会科部会会長　酒井順一氏

◇山形で城下町時代の面影を残している所として、第一は霞城公園…山形城跡ではないかと思いますが……。

〈鈴木〉山形市街地図を広げてみると、中心地に約十万坪（三十三ヘクタール）という広大な霞城公園があります。これが無傷で残ったことに注目したいと思います。これが山形市のものとなったことには、先人の大きな努力がありました。

〈石川〉明治三十年の軍隊誘致で米沢と競ったわけですが、山形設置にきまって、堀・石垣が撤去されました。

それが現在あらためて発掘され、整備工事にはいっているのは喜ばしいことです。

◇山形市のものとなったいきさつを、ちょっと。

〈鈴木〉終戦時に大蔵省の管理下にあり、これを切り売りされては困ると、当時市会議員だった父伝六と同僚が交渉にあたり、見事山形市が買い取ることができたと聞いてい

ました。

市街地の中央部に城あとがそっくり残っているのは全国でも珍しいと言われていますね。二の丸跡の広い敷地、高い土手と石垣、水をたたえたお堀、そして豊かな緑、山形市民の大切な財産であり、大きな誇りです。

酒井氏

〈酒井〉教育の立場から言うなら、子どもたちにとって格好の学びの場、交流の場、そしてスポーツや遊びの場でもあります。四季を通して変化する自然を相手の体験もできる、価値ある空間と言えるでしょうね。

◇昭和五十三年から三十年がかりでの整備計画が立案され平成三年に二の丸東大手門が復元されました。今は第二段階として本丸一文字門と堀跡が発掘され、石垣が往時の姿を現わしてきています。

〈石川〉今、すごい石垣が技師の手や重機の力で積み上げられていますが、昔はだれがどんな作業をしたのだろうといろいろ想像してしまいます。荻原一青の描いた山形城が目の前に出現する日が、一日も早いことを願っています。

〈酒井〉調査や復元作業が進んで、いずれ本丸や御殿も目にすることができるでしょうね。子どもたちが成長し、山形をはなれて世界で活躍するようになったとき、ふるさとの山形城跡で遊んだことを思い出し、きっと勇気づけられるのではないでしょうか。

〈鈴木〉ぜひそうあって欲しいですね。城跡がただそこにあるというのでなく、山形の歴史を物語り、山形人の心を豊かにささえるもの、それが霞城であり、最上義光という人物だと思うのです。

◇歴史館が開館十年を迎え、入館者は二十万人を超えました。資料を収集展示し、いろんな事業も実施してまいりましたが、それらへのご感想、今後へのご希望など、お聞かせください。

鈴木氏

〈鈴木〉入館者が二十万人を超えると聞いて、関係者の努力に敬意を表します。

そこで提案ですが、スケールを大きく考えてみたいですね。県立中央病院跡地に、霞城公園や歴史館と合わせて関連施設及び駐車場をつくってはどうでしょうか。駅西口再開発による霞城南門に通じるルートに観光客や市民を誘導する。そして、歴史館を観光客のメッカにしてはいかがでしょうか。

〈石川〉企画展、講座、研修など、多岐にわたる活動に敬服しています。あえて言うならば、時代を網羅する歴史館が可能かどうか。江戸時代の歴代大名、最上時代の広い領地全般にわたって史料、古文書、関係書籍なども収集して欲しい。県都にふさわしい規模の歴史館の建設をという希望になります。

〈酒井〉歴史館主催の子ども講座には、わたしたち小学校社会科部会も協力させていただきましたが、最上義光の業績に触れながら、身近な歴史に興味関心を持つことをねらいとしたものでした。

堀の幅や深さを測るなど体験活動を取り入れ、クイズ形式のくふうをして、小学生にも楽しく興味をもってやれたと思っています。

これからも、お堀にボートを浮かべての探検など、夢のある講座を期待します。

◇最上家や山形の歴史にかかわるご経験で、印象深いことや特筆すべきことなどございませんか。

〈酒井〉個人的なことですが二十年ほど前に「義光と山形のまち」という単元学習を構成して学習に取り組んだことがあります。当時はまだ資料が少なくて苦労したことを思い出します。

また、秋の運動会では「風雲山形城」のオリジナル剣舞を踊り、遠足では畑谷古戦場を通って白鷹山登山と、一年間を通して義光にこだわった学習活動となりました。

石川氏

〈石川〉最近小さな旅で、最上郡大蔵村の清水城跡に行きました。よく残していたものと思いました。そこでは、最上家親と戦って滅亡した清水義親や義光の奥方となった清水御前が、妙に気に掛かりました。それをよく知らないので、勉強不足を反省させられました。

学校では教えない郷土史にもっと早くから関心をもって学んでいたら、旅はもっと楽しいものになったと思ったところです。

〈酒井〉今年四月から総合的な学習が実施されます。これを活用して、わたしたちのまちやまがたを歴史的な視点から探究していく、歴史さがしの旅が展開されることも期待したいと思います。霞城も義光もまだまだ探究し尽くせぬ魅力ある素材だと思います。

〈鈴木〉わたしの場合、特に最上義光公銅像制作と義光顕彰詞碑文制作過程に思い出があります。銅像はご承知の通り父伝六の寄贈によるものですが、二本足で立った騎馬像にしたいという父の強い願望と、二本足は無理という制作者西村忠氏とは平行線でした。しかし、あるヒントを得て日本で初めての二本足の銅像に成功しました。顕彰詞も、史実に基づいた間違いない碑文にするため、郷土史の諸先生に取り組んでいただきました。霞城公園をウォーキングするたびに、当時を思い出します。

◇多方面から貴重なご意見を賜り、ありがとうございました。今後もご意見に添えるよう努力したいと存じますのでよろしくご支援ください。

霞城公園の義光公騎馬乗像

こども講座に参加して

山形市立第七小学校　小田　千絵美

私は、霞城公園の北門の近くに住んでいます。小さい時から、霞城公園は、私の遊び場でした。小学生になってからも、霞城公園に学校で行っています。

しかし、私は、最上義光のことは、ほとんど知りませんでした。

昨年の夏休みの前に、最上義光歴史館で、子ども講座があると、お父さんに聞き、夏休みの自由研究ができるのではないかと参加してみました。

当日、先生方にお聞きしたことをまとめてみます。

最初、北門の石垣のことについて調べて、いろいろな印がきざまれていることを知りました。その印は、石を運んだ人の目印だったそうです。次に、最上義光像のある場所東大手門に行きました。五つのしゃちほこがかざられていました。東大手門の石垣の高さ、付近の堀の深さ、橋の長さなどを実際にはかりました。石垣の高さは約十八・五m、付近の堀の深さは約一・二m、橋の長さは約十六・五mでした。

夏休みの自由研究「やまがた城のひみつをさぐろう展」

今、本丸の調査をしているそうです。質問をしてきました。四年前まではうまっていて、石垣と石垣のところに橋がかかっていたと思われること、石垣の石は1個1トンあるとかを知りました。

義光公のお墓がある、光禅寺にいって、義光公のあとを追って切腹した人のお墓なども見ました。それだけすごい人なんだなと思いました。

私は、この研究をして、身近な所にもこんなにもすごい人がいたなんてビックリしました。

歴史館に私の研究が、てん示されたり、また、第七地区のきょう土史研究会の方に、江南公民館にてん示していただきまして、大変ありがとうございました。

今後も山形の偉人を調べてみたいと思います。

石垣の高さや堀の深さを計る

ご協力のお願い

最上家にかかわる資料等をお持ちの方、ご存じの方、ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立てたいと思います。よろしくご協力ください。

連絡先　財団法人最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-53
☎023-625-7101
FAX 023-625-7102

編集後記

歴史館の喫茶室は外からも出入りできるようになっております。二月の雪がまだあたり一面に残っているのに、喫茶室ではいただいた紅梅がもう散りはじめております。いつもこの季節になると霞城公園の梅林で剪定した枝をわざわざ届けてくれる。

本記念号の十年のあゆみ編集のため、幾重にもなった記録写真のファイルをめくっていると、かかわった方々、ご苦労、出来事などさまざま思いめぐらされて歴史の重みとなって胸に迫ってくるようです。このたびは特に多くの方から貴重なご寄稿をいただきました。その土地の歴史は、まさにそのまちの個性、温故知新、役割の一翼を担って大切に伝えて行きたい。

ご利用について

●開館時間　●午前9：00から午後4：30
●入館料　●一般　大人300円　高校生200円
（小中学生100円・土曜日無料）
団体　大人240円　高校生160円
小・中学生80円
●休館日　●月曜日（国民の祝日と重なる場合はその翌日）
12月29日から1月3日
●交通　●JR山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分

山形市大手町1-53
TEL 023-625-7101
FAX 023-625-7102